

着装によって生起する多面的感情状態の構造
 (第3報)感情状態の測定

京都府大短大 ○泉加代子 梅花短大 家本 修
 奈良女大生活環境 中川早苗 鳴門教育大 藤原康晴

目的 着装によって生起する感情状態測定尺度の作成を目的として、前報では着装時に生起する感情を表す用語を収集し、その用語の意味類似によるクラスター分析から着装によって生起する感情状態の構造を検討した。今回は場面別に提示被服の着装を想定したときにどのような気分になるかを評定させ、評定値に対して因子分析およびクラスター分析を行い、感情状態の構造を明らかにするとともに、尺度作成のための評定項目を検討する。

方法 着装場面として、1.通学、2.学外サークル活動、3.デパートへのショッピング、4.卒業記念パーティ、5.会社訪問の5場面を設定し、各場面に適合あるいはやや不適合の服装写真を刺激として提示して、その被服を着装したとき生起すると思われる感情状態の程度を95語の感情用語による単極4点尺度で評定させた。対象は計974名の女子学生で、1993年11月に実施した。その評定結果を5場面まとめて主因子法による因子分析およびワード法によるクラスター分析を行った。本報では、服装ごとに評定値の平均値を算出して場面別にプロフィールを求め、t検定による差の検定を行った結果を報告する。

結果 場面に適合した着装をした場合とやや不適合の着装をした場合とで有意差(危険率0.1%)のある項目は、5場面平均で全項目の84%であった。場面1と2のプロフィールは近似しており、適合した着装をしたときに生起する主な感情は、この2つの場面では「若々しい」「活気のある」、場面3では「すっきりした」「さっそうとした」、場面4では「はなやかな」「楽しい」、場面5では「ひきしまる」「知的になった」などであり、やや不適合の着装をした場合は5つの場面とも羞恥心が強く生起する感情であった。